



： 卷 頭 言 ：

弛まぬモノ作り“技術革新”が幸せな社会を築く

(財) 日本植物調節剤研究協会 会長 小川 奎

2008年は、世界規模で生じた食料や金融の危機が、わが国の産業・経済と国民生活に影を落とした。不安定化する世界の食料情勢や、食の安全性に関わる中国製冷凍ギョウザやミニマムアセス米の事故米流通事件を通じて、6割を海外に依存しているわが国の食料安全保障の危うさが浮き彫りになり、金融危機は、世界中を巻き込み、雇用という大きな社会問題にまで発展している。

金融危機についても少し興味を持ち、通勤電車の行き帰りに「強欲資本主義 ウォール街の自爆」(文春新書 神谷秀樹著)を読んだ。著者はニューヨーク在住の日本人投資銀行家という。「アメリカのあらゆる産業でモノ作りができなくなっている。貿易収支の赤字が膨大なため、金融に力を注ぎ、世界中に垂れ流したドルを還流させることでしか国がもたなくなった」とアメリカ経済の衰退を、自己の体験をもとに解説する。

そのなかで、「万人を幸福にする健全な経済社会は、弛まぬモノ作り“技術革新”でしか築かれない」との主張は、心に響くものがある。自動車大手GM会長の「企業としての至上命題は、株主への利益還元で、採算の合わない事業は削減する」と言ったモノ作りを軽視した経営理念を批判し、その対極に「我々が欲しいのは顧客であり、顧客のためになる新しい技術の開発には、どんなにお金をかけてもいい」という別の経営者の理念を対比させ、「どちらの会社が、より高いモラルで社員が働き、顧客が求めるより良いものを作り発展するであろうか」と鋭く問い掛けている。

農業は幸福な社会を築くモノ作りの原点そのものである。わが国の農業は担い手不足や高齢化な

ど深刻な状況ではあるが、技術力では劣っていない。因みに、2008年産水稻の単収543kg/10aは、ここ30年間のうちで、1994年の544kgに次ぐ、高い単収を記録した。ここで、特に注目したいのは、作況指数の基礎となる平年単収の推移で、94年の499kgに対し、08年は530kgと6.3%も向上している点である。

このような豊作は、08年を飾る明るいニュースとして、もっと報道されてもいいのではないかと思う。にかかわらず、今なおコメ過剰という、やるせない矛盾を感じる。お米の豊作が素直に喜ばれ、生産者価格に反映される世の中になってこそ、生産者に元気が生まれ、真の自給率向上への弾みになるのではないだろうか。農林水産省はこの1月から、食料・農業・農村基本計画の見直しを始め、おおむね10年後食料自給率50%の達成について検討しようとしており、その取り組みに期待したい。

前述した平年単収の伸びの根底には、精密で、省力的な栽培技術の高度化、例えば雑草防除の場面では、広範な草種に有効で、省力性、安全性に優れた除草剤の開発と普及という弛まぬ技術革新がある。農薬開発もまたモノづくり産業である。各農薬企業は収益環境が厳しさを増すなかでも、「顧客サービスに徹し、技術力を生み出す研究開発投資が将来の成長を支える」との企業理念がしっかりしており、心強い限りである。当協会も除草剤等の開発の一端を支えるものとして、これまで蓄積してきた試験研究のレベル、信頼性をさらに高め、開発の効率化・高度化、そして使用場面の多様化にも寄与したいと考える。